

自織り紬で成人式

与論留学、「私の故郷」

横浜の川越さん

「軽くて気持ちいい着心地だった。友だちに『きれいなね』と褒められましたよ」。単身移住して中学、高校の4年間を与論島で過ごした横浜市の大學生川越夢津美さん(20)。今年の正月、与論高校時代に自分で織った大島紬の晴れ着で節目を迎えた。

横浜市で母と二人暮らしだった夢津美さん。移住したのは中学3年進級の2011年春だった。

美奄

与論町古里で民宿「楽園荘」を営む本園金盛さん(68)、秀幸さん(43)一家が受け入れた。

「中学2年の時に一人で来て手伝いしながら1カ月過ごして帰った。その前にも与論には母親と来てたようだけど。海が本当に大好きで、うちの家族にもなじんでね。『与論に住みたい』『住んじゃえば』。そんなやりとりはあったが、本当に住

みに来るとは思わなかった」と金盛さん。夢津美さんは与論中から与論高に進学。与論暮らしを満喫した。暇があれば海に出掛けた。水上バイクの免許を取ってバナボートを引っ張ったり、カヌーを教えたり、観光客のもてなし役も務めた。

大島紬を知ったのは高校時代に自分で織った大島紬の晴れ着姿の川越夢津美さん(1月2日、与論町古里(本園金盛さん撮影))

.....

校1年時。『織ってみたら』『織ってみれば』。そんな感じ。やるなら自分の成人式用にと思って織り始めた」と夢津美さん。

指導したのは本場奄美大島紬伝統工芸士の山下久江さん(66)と与論町、山下織物代表。希望を聞いて生糸2反分を朱色に染め、織り道具一式を楽園荘に運んだ。山下さんは「びっくりの注文でしたよ。大丈夫かなとも思った。糸を切ったりしてね、何回か教えに通った」と振り返る。織り上げるのに約2年かかった。反物は山下さんが預かり、成人式に合わせ京都で仕立てた。

夢津美さんは町の成人式があった1月2日、そでを通した。「ちよつとほつれとかあったけど、それも高校生の時の頑張りの証し。たまに行き詰まって大変だったけど、みんなに助けてもらったんですよ」

金盛さんは庭で夢津美さんの晴れ姿を記念撮影。「高校までは怒ったりもしたよ。うちの家族

